＜地球をあるく＞

カナダ留学記

森本 壮亮

はじめに

昨年の5月から約5ヶ月間、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」（通称：京都エラスムス計画）の制度を利用して、カナダのウィニペグ（マニトバ大学）に留学してきました。なぜカナダ、しかもトロントでもバンクーバーでもなくウィニペグに？というと、一昨年のとある国際学会（World Association for Political Economy）で、Alan Freeman というマルクス経済学の価値論研究では有名な研究者と出会い、彼が現在ウィニペグに住んでいるからです。

しかし、帰国子女でもなく海外旅行すら行ったことのない自分にとって、留学は大きな決断でした。しかも、ウィニペグをウィキペディアで調べてみると、「夏は蚊で覆いつくされ、冬はマイナス40度」と、どうやら恐ろしい所のようです。ただ、もう失うものは何もないような大学院生を長らく続けてきているので、たとえそこがどんな所であっても状況はさほど悪化しないだろうという、半分投げやりな気持ちで飛行機に乗りました。

学会でボストンへ

ウィニペグに行く前に、学会発表のためにまずボストンに入りました。ボストンは日本の大都会と同じような感じで高層ビルの建ち並ぶ大都市でしたが、中心部こそ地下鉄が何線かあったものの、一歩郊外に出るともうそこは車社会、タクシーもあまり走っていないので、自家用車がないとホテルへたどり着くのも一苦労というようなまちでした。ホテルは地下鉄ではなく近郊列車の駅の近くだったのですが、ボストン北駅からわずか1駅の所なのに、朝夕でも1時間に1本列車があるかどうかというレベルで、単線です。片や並行する道路は大渋滞。富山市のように公共交通を再考する必要があるのではないかと、旅行者ながらに感じました。

学会はマサチューセッツ大学アムハースト校であったのですが、参加者のほとんどが北米やヨーロッパの研究者で、ここではじめて自分は異国に来て、今後5ヶ月間はこの別世界のような土地から逃げられないのだという恐怖感にかられました。この学会にはたまたま仲の良い友達も来ていたのでまだよかったのですが、ボストンで彼と別れてからは、まさに顔面蒼白でカナダ行きの飛行機に乗りました。

移民の国カナダ

そしてカナダ。まずオタワの入管で、留学先のマニトバ大学からの正式な招聘状を見せてもまるで罪人扱いのような長時間の尋問と荷物検査を受け、「外国人」というものを実感しました。そして何とかウィニペグにたどり着いたのですが、ここはボストンとは異なり、旅客鉄道はないものの、バス天国。京都市のように、かなり発達したバス網が市内に張り巡らされていて、市内の移動はボストンよりも便利です。

宿泊に関しては、夏の間北米の大学は“summer accommodation”といって、大学の寮を一般開放しているので、大学の寮に滞在することができました。日本の大学は学生寮を作ることには消極的で、自分もこれまで寮に住んだ経験はありませんでしたが、他の学生達と一緒に大学構内の建物の個室に住めるというのは、こんなにも素敵なことなのかと、まず感動しました。

学生の人種比率は、白人、黒人、アジア系がそれぞれ3割くらいで、なぜか奇麗に均等になっています。聞く所によると、ウィニペグはカナダで最も物価が安いためにアフリカからの留学生が他の都市よりも多いのが理由だとか。アジア系は中国からの留学生が群を抜いて多く、次に韓国系、そして日本やその他のアジア地域からの留学生がごく少数いるという感じです。

中国からの留学生に関しては、カナダへの留学の条件としてかなりの額の保証金が必要とされるので（働くために来たのではないことを証明するために、ある程度の額の預金残高を証明する書類を提出させられるとか…）、家庭環境について聞くと「親は会社の社長」「両親ともに国家官僚」というのがほとんどで、まだ10代なのにドイツの有名ブランドのスポーツカーで通学という光景を、幾度となく目の当たりにしました。現地で出会った限り日本人学生で車を所有している人は一人もおらず、車を持っているのはもっぱら現地のカナダ人と中国人という感じです。不思議だったのは、現地で友達になった中国人留学生のほとんどが、「近いうちに戦争が起こるだろうから、親に安全な北米に留学させられた」と言っていたことです。中国の富裕層は戦争を見込んで、北米に子息を留学させているようです。

韓国系の学生も次いで多かったのですが、彼らは移民2世が多く、移住して来たばかりの中国系と比べると、もうかなりの程度カナダ社会に溶け込んでいる感じです。韓国系の友達によると、徴兵制や韓国のタテ型社会構造が、移民の多い理由だとか。ただ、韓国の経済発展とともに移民は減少に転じているようで、2010年度にはじめて、韓国への帰国者の数が移民を上回ったと聞きました。大学からカナダに来た韓国人の友達2人に聞いたところ、1人はこのまま移住してカナダ人になりたいと言ったものの、もう1人は大学を卒業したら韓国に帰りたいと言っていたのが印象的でした。

さて、（親子代々現地に住んでいる白人系の）カナダ人に話を転ずると、少なくとも目に見えるような形では日

E.O.Wright の講演の様子

本にはほとんど存在していないような明白な階級構造があるようです。カナダというと、公用語は英語とフランス語というのがまず頭に浮かびますが、かつては、主にイギリスからの移民であった資本家階級と、フランスからの移民であった労働者階級から社会が構成されていたそうです。今では言語でいずれの階級かわかるというほどでもなくなっているようですが、家庭の言語で、自分がいずれの階級の出なのかがわかるみたいです。

また、住んでいる場所と階級も大きく関係があるようです。ウィニペグにもう何十年も住んでいるカナダ人の友人がまちを色々と車で案内してくれたのですが、「ダウンタウンより北は労働者階級が住む地区」「南東のタキシードと呼ばれている地区は資本家階級の地域で、ほんの20 年くらい前までは WASP しか住めなかった」などと言っていたのが印象的です。日本でも神戸の六麓荘のようにある程度の社会的地位とお金がないと住めないような地域はありますが、明確に線引きできるくらいに地図上にも階級構造が存在するようです。

ウィニペグの経済と社会

留学期間中の前半は南地区にあるマニトバ大学内の寮、後半はダウンタウンにあるウィニペグ大学の寮に住んだのですが、ダウンタウンといっても高層ビルがいくつかあるくらいで、日本の都会とはほど遠い感じです。現地の学生に聞いても、やはり産業がほとんどないから就職先も片手で数えられるくらいしかなく、友人の友達には政治学の修士課程を出たものの、時給 10 ドルの犬の散歩の仕事にしかつけなかった人もいるとのことです。そして現下の恐慌でさらに就職状況は厳しさを増しているようで、ダウンタウンや北地区では物乞いをよく見かけました。そして少し問題だと感じたのは、物乞いのほとんどが原住民系の人達だということです。ヨーロッパからの移民が来る前から住んでいた原住民の人々は、先祖代々の土地を奪われただけでなく、子孫代々までルンペンプロレタリアートになってしまっているという状況は、悲劇以上のものがあります。

就いている職という点から見ると、人種による職の構造というのが非常にはっきりしています。ダウンタウンの高層ビルから背広で出てくるいわゆるホワイトカラーや資本家は白人、タクシー運転手はインド系、スーパーのレジはアジア系とインド系、清掃員は黒人、というようになっています。ただ、現地で出会った 40 年間ウィニペグに住んでいるという日本人のおばあさんによると、1970 年代までは白人がほとんどだったそうです。この 2、30 年の間にアジアやアフリカから「アメリカンドリーム」のようなものを抱いた移民が大量に来たものの、労働者階級の下層に沈殿してしまっている様子です。

このような社会構造の中で気づいたのは、下層に沈殿してしまっている非白人系の移民（特にアジア系、中南米系はウィニペグには少数）は、政治にはあまり興味がないことです。この間のアメリカ全土における（オキュパイ）デモは日本でもたびたび報道されて来ていますが、その映像からもわかる通り、労働運動の主体は白人で、移民は自分達も市民であるのに、そんなことどこ吹く風という感じです。自分の職を見つけるので精一杯なのか、社会への帰属意識が薄いのか、社会のあり方までは考えている感じではありません。マニトバ大学で労働経済学を研究している友人は「今のアメリカの失業率はフランス革命前夜の失業率よりも高い」と口癖のように言っていましたが、確かに白人層には危機意識が広がっている

ものの（マスコミでも毎日のように真剣に議論されていました）、今や大きな割合を占めるに至っている移民層は政治には無関心だから（社会主義国からの移民は資本主義を支持する傾向にある上、中国系は上述のようにほとんどが資本家階級）、政治がひっくり返らないのだと感じました。移民受け入れも、資本主義の再生産に大きな役割を果たしているようです。

このように移民は政治にあまり興味がない様子でしたが、ウィニペグにずっと住んでいる白人層は、自分達の政治にかなりコミットしています。ことあるごとに州や市の政策について近い仲間どうしで話し合い、その話し合いを端で聞いていると、意見を異にするグループの多くも顔見知りのようです。「ウィニペグは小さいまちで、みんなが知り合いなのよ」という言葉が非常に印象的でした。

7月末には、アメリカから社会学者のE.O.Wrightがカフェに講演にやってきたのですが、ダウンタウンのはずれにある本屋の中の小さなカフェに、市民や学生が50人以上集まり、社会のあり方や政府の役割について熱く議論を交わしていました。しかも平日の夜にです。確かにE.O.Wrightは有名な学者ですが、別にノーベル賞学者とかでもない一学者の話にこれだけの一般人が集まり、議論をしているというのは、北米の底力を垣間見たような気がしました。

Winnipeg Marx Reading Group

このウィニペグでは、毎週木曜日の夜に“Winnipeg Marx Reading Group”という読書会が開かれています。その名の通り、マルクスや関連著作を読む読書会で、ウィニペグの大学教員、院生、学部生、社会人が参加しています。もともとはマニトバ大学の教員・院生数名が『資本論』第1巻を一緒に読もうと発案して発足したものらしいですが、上述のように顔見知りの多い小さなまちなので、社会人も多く参加するようになったようです。

私の滞在中は夏休み中が主だったので、その間はバカンスで抜ける参加者のことも考慮して、フランス三部作やエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』など、2、3週で気楽に読めるものを読みました。中でも圧巻だったのは、「ユダヤ人問題によせて」を読んだ時です。読書会の参加者には、ユダヤ系の人も多くいたので（祖父か祖母がユダヤ人という人を含めると1/3以上がユダヤ系）、ユダヤ人が集まって「ユダヤ人問題によせて」について熱く議論しているという、まず目にすることの出来ない光景を見ることができました。やはりユダヤ人問題というのは西洋では大きな問題のようで、読書会のユダヤ系参加者達も、マルクスの議論に対して賛否両論まっ二つに分かれて、激しく議論していました。ただ、日本では「ユダヤ人」という社会勢力が実際に存在しているかのように思われがちですが、現在では混血が進み、何をもってユダヤ人とするかという定義も問題になるほど、有名無実なカテゴリーになってきているようです。

夏休みが終わった9月後半からは、マルクスの『経済学批判要綱』を読み始めました。読書会のメンバーには、政治学が専門のR.Desai、フランス史が専門のH.Heller、価値論が専門のA.Freeman、労働経済学をやっている院生のZ.Saltisと、様々な分野の専門知識を有する役者がたくさんそろっていたので、そのような異分野の研究者達、それに加えてカナダの労働者達が『経済学批判要綱』を読んだとき、どのような感想や意見を持つのか非常に興味があったのですが、10月には帰国しないといけなかったので、はじめの一部分しか一緒に読めなかったのが残念です。ただ、一行一行の意味を精密に理解していくことを重視する日本の傾向とは違い、今現在社会で起こっている問題の理解や解決に向けて、マルクスの分析がどのような視点を提供しているかが重視されていたのが印象的でした。

また読書会のほかに、研究分野の重なるAlanやZacとは、Alanの家やカフェなどに集まって、Alanが唱えている“Temporal Single System Interpretation（TSSI）”や、利潤率の傾向的低下法則について、意見や情報の交換をしました。利潤率の傾向的低下法則に対しては、“Okishio Theorem”と呼ばれる置塩信雄の反論が国際的にも有名です。このトピックについては、特に現下の恐慌分析とも絡んで学界でも関心が高まっており、Alanをはじめ TSSI を唱える研究者群も、置塩批判を展開しています。しかし、置塩の論文は英語版と日本語版では内容に大きな差があり（正反対の結論となっている）、その日本語版の紹介も兼ねて、英語になっている置塩の諸論文を一緒に読んで検討しました。“Winnipeg Marx Reading Group”のディビジョンシリーズとしての“Winnipeg Okishio Reading Group”です。

北米やヨーロッパには、Union for Radical Political Economics（URPE）やHistorical Materialism（HM）、Association for Heterodox Economics（AHE）など、マルクス経済学の学会がいくつかあり、ボストンで参加したWAPEの大会もURPEと共催でした。今夏はパリ第1大学でAHEの大会が開かれます。そこで読書会のメンバーの幾人かと再会するのが楽しみです。

（京都大学大学院）